

友情について考える



インターネットで、次のような記事を読みました。

「日本人はみんなに優しくていい顔するから友達になりにくい」^①

2015年10月4日

日本にいる外国人は（全てではないが）よく、「日本人と友達になるのは難しい」という。その理由をつっこんで聞いてみると、「日本人は何を考えているかわからない」とか、「日本人はうわべだけ」と言われる。日本在住外国人の中には、日本人のいないところで、「日本人は hypocrite だ」と言う人もいる。

hypocrite（ヒポクリット）とは、「偽善者^{ぎぜんしゃ}」、「猫かぶり^{ねこ}」という意味で、非常にネガティブな言葉だ。英語でヒポクリットと言われると、全面的に否定をされたように聞こえ、ドキッと、そんなことはないと言いたく、反論したい気持ちになる。日本人は英語で言うところの hypocrite には当てはまらない気がするからだ。

それではなぜ、外国人は日本人はヒポクリットだと感じるのだろうか。どこから誤解が生じ、どこにすれ違い^{ちが}があるのだろうか。

それは、日本人が「みんなに等しく親切だから」ではないかと思う。

筆者がそう思うのは、日本で英語講師をしているアメリカ人のTの体験談が元である。彼は数年前、留学生として日本にやってきた。留学期間を終えた帰国の1年後に、小学校の外国人教師としてまた日本にやってきたのだが、彼が日本へ引っ越して来る際に、諸々の手続きや部屋探しなどを手伝ってくれるよう、留学生時代にできた日本人の友人数人に声をかけたそうだ。

彼がそのとき、一番当てにしていた友人はケンタ（仮名）。…（中略）… Tの帰国後にケンタがアメリカに遊びに来たときは、もちろんアパートに泊まらせてあげたし、観光の案内もした。Tは日本生活を始めるのに、きっとケンタは手伝ってくれるだろうと期待していたそうだ。

（左のページへ）

②

しかし、「手伝ってほしい」といくらメールをしてもケンタからの返信はなかった。Tはケンタを頼りにしていたので、とてもがっかりしたという。日本語が日常会話レベルの彼にとって、部屋探しのための不動産屋との会話も、大家さんとの会話も一苦労だった。

そんな彼を救ってくれたのは、彼はそこまで仲がいいとは思っていなかった日本人、ケンジ（仮名）だった。ケンジは、彼と頻りに連絡を取り合ったり、遊んだというわけでもなく、会ったら話す程度の仲だったそうだ。しかし、ケンジは不動産屋と一緒にまわってくれたり、役所の手続きをしてくれたり、休日をまるまるつきあってくれたり、とにかく献身的に尽くしてくれたという。Tはこのときの体験を振り返って、こう語っている。

日本人はアメリカ人と違って、みんながみんなに親切だから、自分にとって誰が本当の友達なのかわかりにくいよね。日本人と接していると、どの人も僕の“最高の友達”に思えてくる。でも、“仲が良い風”に見える人が本当に自分のことを大切に思ってくれているとは限らない。こういうことはアメリカでももちろんあるけど、特に日本では、自分の友達が誰なのかわかりにくいなあ。だって、みんなすごく“いい人”に見えるから。

これは友人ケンタの問題であって、全ての日本人に当てはまるわけではないが、彼の言わんとするところは何となくわかる気がする。……

© Copyright 2015 - Madameriri.com

これはあくまでも、一つの意見です。しかし、このように、いざという時に、「あれ、違ったのか……。」と思うようなことはありませんか？

この記事を読んで、以前、読んだ本に載っていた調査結果を思い出しました。

「思春期の子ども世界4都市調査」

(2000年11月～2002年3月) 対象：中学3年生(14～15歳)

日本 1,377人、スウェーデン 782人、アメリカ 746人、中国 721人

河地和子「自信力はどう育つか」(朝日新聞出版)より

図1 学校生活で一番大切なのは次のどれですか？

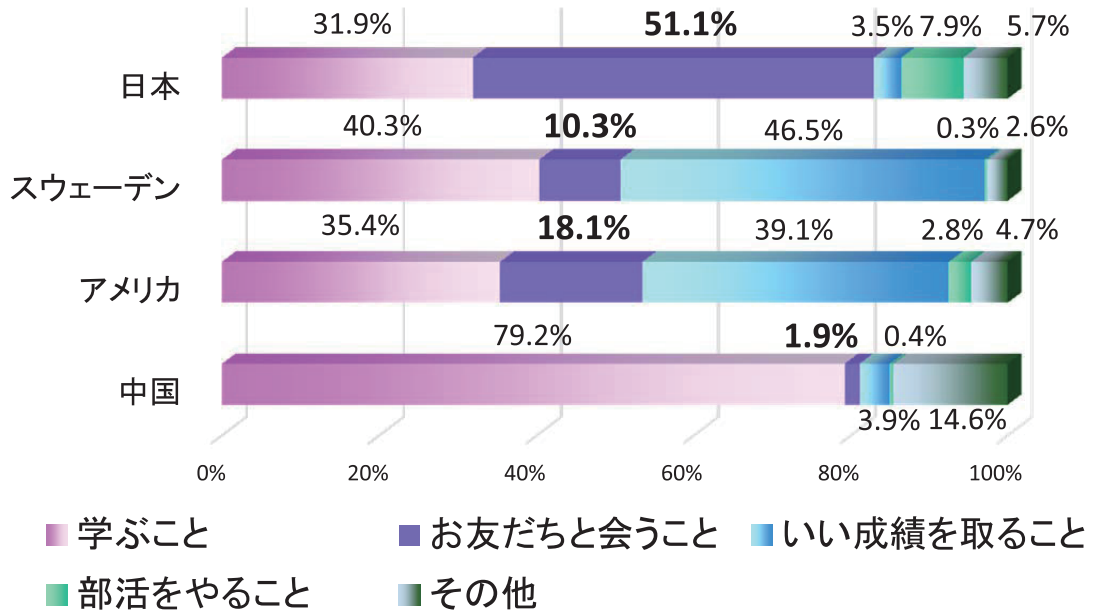
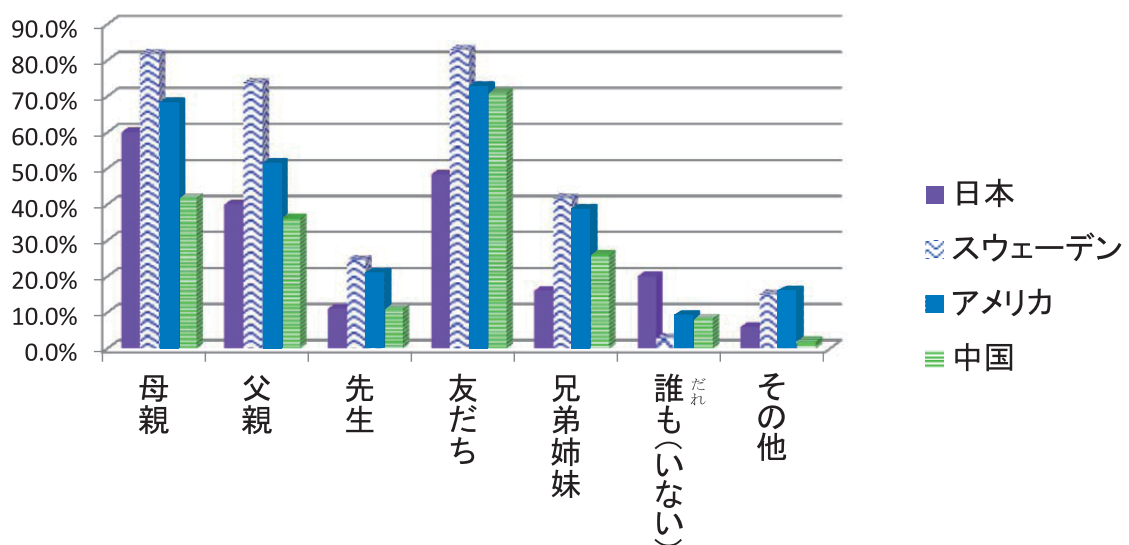


図2 自分の将来や、将来の職業に関して、誰と相談したり、話し合ったりしますか？(複数回答)



友情について考える

この調査結果は、およそ 15 年前の中学校 3 年生のものです。

注目したいのは、「学校生活で一番大切なのは次のどれですか？」という質問に対し、日本の中学生だけが「お友だちと会うこと」の回答が最も多くなっているにもかかわらず、「自分の将来や、将来の職業に関して、誰と相談したり、話し合ったりしますか？」の質問に対しては、「友だち」と回答した生徒の割合が低いこと、また、「誰もいない」の回答の割合が高いことです。

この調査結果で浮かび上がる、この頃の日本の中学校 3 年生の姿はどのようなものでしょうか。

今、中学校 3 年生の君たちに、同じ調査を行ったとしたら、どう答えますか。

「友達」とは、「友情」とは…、私たちにとってどのようなものでしょうか。例えば、日常の会話で、「友達がたくさんいて、いいね！」といったことをよく聞きませんか？ それでは、「たくさんいることはよいこと」で、「たくさんいないことはよくないこと」なのではないでしょうか？

「友達」、「友情」について、改めて考えよう。

この調査を行った河地和子先生が、大学生にインタビューした際、このような意見がありました。

学生の意見

「学生同士話したところであまり意味ある会話にならない。自分で自分のエネルギーを持て余している子ども同士なんで。そういう同士が相談し合ったとしても仕方ない。互いにそう思っているから表面的な話ばかりしていて、深いことを話さない。友達なのにそういう思いが伝わってしまって、お互いに気まずいこともある。」

河地和子「自信力が学生を変える」（平凡社新書）より